

Mixi コミュニティ
『創作が好き!』編集
第6作品集

泣物語

The tale which cries

2012年5月9日～6月30日

喜怒哀楽指定企画

『たまには思いっきり泣いてみよう』

参加作品集

冒頭に寄せて

そらーさく「サウー」【創作】

- 1 新しいものをつくり出すこと。
- 2 文学・絵画などの芸術を独創的につくり出すこと。また、その作品。
- 3 つくりごと。うそ。

そらさくぶつ【創作物】

- 1 創作されたもの。特に、芸術作品にいう。
- 2 人の知的創作活動の産物の総称。
著作物・発明品・実用新案・意匠・商標など。

『創作』活動を至上の喜びとする作家が居る。

そのような作家たちのコミュニティケーションの場を提供したいと開設されたのが、Mixer内のコミュニティ『創作が好き!』である。

今回は、これまでと少し趣を変えた企画を考えました。

皆さんは最近、思いつきり泣いたこと、ってありますか？

嬉しかったり、悲しかったり、悔しかったり、

大好きなスターに会えて感激したり、孤独が苦しかったり、

幸せすぎて胸が一杯になったり。

様々な場面で、人は涙を流します。

皆さんもこれまで数多くの小説で、そういう場面を見かけたでしょうし、
ご自身でも書かれたことと思います。

しかし！しかあし！

号泣するところまで泣かせたことはありませんか？

泣き疲れて全身の力が抜けるくらいの号泣を、登場人物にさせたことがありますか？

つまり、今回の企画は、こういう事になりました。

『とにかく作中で、登場人物を前後不覚になるくらいに号泣させ、その描写を細かく描いて下さい』

このルールに基づいて書かれた作品群が、今回この冊子にまとめられています。

書いている内に自分が号泣してしまうくらいの、パワーのある号泣小説—
—になったかどうかは作者さん次第ですが、かなり面白い作品が集まりましたので、ぜひご覧くださいませ。

Mixerコミュニティ『創作が好き!』副管理人

および当イベント企画立案者

榎崎 六呂(かーる)

『無題』

(P. 93)

…… しちみ黒猫 作

(著者紹介 しちみ黒猫)

6月20日生まれ。猫とイルカとドライブが大好きなアラフォー世代。ニヤヤの時代からネット上にて小説を公開されている、ネット作家の重鎮。ニコニコの「コミュニティ」『創作が好き!』にて管理人を務める。

著作に『シャム猫物語シリーズ』『猫目銀河シリーズ』『月と戦車』『やらやらゆれる』等。
趣味はドライブとカメラ。隠し芸はピアノと占い。

『無題』

(P. 103)

…… 翠 作

(著者紹介 翠)

3月30日生まれの『文学派ロック少女』。精力的に創作活動が続けてます。

その作品はテンポを殺すこと無く、しかし文章によどみのない、まさしく独特の『文学』。
好きな作家は太宰治、好きな言葉は『無心』。好きな漫画はクレムリン。

『無題』

(P. 153)

…… 茶々姫 作

(著者紹介 茶々姫)

10月5日生まれの兼業フリーライター。その確かな文章力から紡ぎ出されるのは、重厚な作品世界。
普段は美術と家庭科の得意な看護師である。

オールジャンルについて音楽の話題には絡むが、突然音楽の話題をふられても困ってしまう元クラブっ娘。
好きなタイプは昭和の男、好きな言葉は『ちょっと休んでかない?』である。

『泪』 (P. 188)

(著者紹介 さほ)

11月9日生まれ。小説だけでなく、生け花、切り絵、料理など、創作の幅の広い作家さんである。小説のジャンルは『大人な恋愛日記』一部限定公開にするほどに官能的な作品も執筆されている。好きな習いごとは生け花、好きな言葉は『しあわせはいつも自分の心がきめる』。好きなアートの『ロダンの官能的な肉質が好き』。

……

さほ 作

『ちいさなお家のお話』 (P. 258)

(著者紹介 宇瑠璃春花)

物語を書くのが好きな、看護師兼厨二をこじらせて三十路でアホやってるしあわせ女魔法使い。今年の目標は『のんきで楽しく生活する』こと。

……

宇瑠璃春花 作

創作以外に今好きなことは、小麦粉を使ったお菓子やパン作り、落書きをすること、物語やマンガを読むこと、いろんなことを不思議に思って空想してワクワクすることなど。

『アイキャンフライ』 (P. 408)

(著者紹介 榎崎 六呂)

1973年2月生まれ。EM『かーる』として、Mixiの「コミュニティ『創作が好き!』にて副管理人を務める。

……

榎崎 六呂 作

執筆作品に、『私的国語辞典』『リトライ』『サンタクロース☆クライシス』などがある。フロレスはミラー的に大好き。詰問と無視に弱い。

『無題』 (P. 588)

『涙』 (P. 778)

…… 流民 作

『星々の大海 (三)』 (P. 888)

(著者紹介 流民)

7月27日生まれ。シヨートシヨートから長編まで、多彩なジャンルを優雅に描き出す作家。

『自身でもミキサーにて創作コミュニティ』『自由企画』を運営されており、積極的に創作活動を行なっている。

良く女性や未成年に間違えられることもあるが、爽やかな笑顔でまらりと交わす関西人である。

『意思』 W I L L (P. 618)

『「人生」という映画』 魂の鼓動 (P. 818) …… 矜持 作

(著者紹介 矜持)

自称『真夜中のラブレター書き』。

言葉の力を信じ、人生が辛いものであるからこそ楽しもうとし、感動を求め彷徨う旅人である。

好きな漫画家は日本橋ヨヲコ、たがみよしひさ、吉田秋生、芳崎せいむ、川原泉、みず谷なおき他。

好きな映画第一位は『ルパン三世 カリオストロの城』

好きなアーティストはコブクロ、いきものがかり、馬場英俊、TRUNK、泉谷しげる、矢野顕子などである。

『君へ』

(P. 715)

……

涙夏作

(著者紹介 涙夏)

12月7日生まれ。

イチゴとネットゲーム『ラグナロクオンライン』が無いと生きていけない身体になっている。
好きな言葉は『おかげさまで〜泣いても一生、笑っても一生 ならば今生泣くまいぞ』。

写真提供者

矜持

『無題』（しちみ黒猫 著）

びえあああああ！！！

本当なら天使のようなあどけない顔を真つ赤に怒る仁王のごとく歪め、天を貫き大地を割るように絶叫する幼い少女の足元には、ホワイトベージュ、スカイブルー、ローズピンクといった、つい先程まで特盛トリプルアイスクリームだった物体の無惨な残骸が撒き散らされ、したたり落ちる無数の水滴で塩味に染まっていた。

（了）

「無題」 (翠 著)

電話を取ると知らない男が知らない声で

「人が怖い……人が怖い……」

すすり泣いていた。

私は無言でいた。

「人が怖い……人が怖い……」

男は何度も繰り返した。

しばらくののち、

「あのう……なぜ何も言わないのですか……」

僕が泣いているのに……なぜ人が怖いか、訊かないのですか……
というとき大きく泣き出した。

「うるさい」

私ははじめて口を開いた。

「うるさい。人が怖いなら電話をかけるな。電話をかけるというなら、人が怖いというな」

「ううう……ひどい」

男は歯を食いしばってうなる。

「いいか。私のように気やすく電話をかけられない人間こそ、真に人が怖いのだ」

「じゃ、じゃあ……あなただって、人が怖いのに、電話に出たじゃないですか。人が怖いのに、電話に出ては駄目です……」

「決死の覚悟なのだ。電話を取るとするのは、用件が発生しているから仕方ない。しかしお前は、用がないのに電話をかけているではないか」

「ぼくだって、決死の覚悟でダイヤルを回しているわけです。あなたも人が怖いならわかるでしょう、ええ？ ぼくは人の怖いのに限界がきて、ついに電話をかけるという暴挙をしてまで誰かにこれを伝えねば生きていかれなかつたのです。ですからあなたの方が怖いから電話をかけないというのは、人の怖さとして、怠慢だ」

いつのまにか言い合いになって私の頭に血が上る。

「お前などが人が怖いと偉そうに言うな。やはり、わかりあえない。私は本当に人が怖いのだ。お前よりも」

「僕だって。僕だって人が怖い。人が怖いのはあなただけではない」

「そうだ。怖いのだ。人は怖い。おそろしい」

「怖い、怖い、わあああ」

再び男が泣きだす。

それを受話器に聞きながら、人生の途方のない憂いに涙がこみあげてくる。

「うん。怖い。怖いよな。人は。うう、ううう」

「はい。はい」

「こんなにも。怖いつたらない！ ううう」

「ああ。怖い。何もできないまま。おそろしい。あああ」

しばらく二人で大泣きに泣いた。

こわい、おそろしい、その言葉をひたすら繰り返したんだん何をしているのかわからないくらいとにかく泣いた。

「僕、で、でんわ、か、かけて良かった、です」

「私には無理だ。かけれない、電話なんて。ううう。うわあああ」

「僕だってどうですよ。でも。やっとついに、かけることが、で、できたので
す」

「どうやって。どうやって」

「駄目です。あなたに言っは。あなたは電話をかけるようになれば、もう人が怖くなくなるでしょう。僕は、おいていけません。ううう」

「どうやって。どうやって」

「だめです」

「なぜ。どうして」

「だめです」

私は絶望して激しく泣いた。

ずっと泣いた。男は何も言わなくなった。

どれくらいの間がたったかわからないが、電話は切れた。

私は次の日も泣き続けた。

疲れて黙ったときポストで音がした。

電話が平気になる秘密の方法を知りたいかたはぜひご請求ください。

と紙に印字がされていた。あれは営業だった。私ははじめから一人だった。もう泣くことができない。

(了)

「無題」(茶々姫 著)

食卓のマーマレードはいつまでも減ることなく、瓶の蓋ごと固まっていた。

ほっぺたにチョコレートクリームをつけた息子は、同じテーブルに着く俺のほうを見ることもなく、トーストをかじっていた。テレビに夢中になっている息子に向かって小声で言った。

「。パ。パは帰らないからな」

息子はテレビからこちらに顔を向けたが、こいつは何を言っているのだろうかというような冷たい目で俺を見て、すぐに顔を元に戻した。妻はまだ寝室で眠っている。これが我が家の平凡な朝の風景だ。俺がいよいよがいまいが、平凡なのだ。

湿気っている。団地の狭い部屋も、今の生活も、妻の体も。雨がじとじと降り続けて一週間以上経つ。外の紫陽花だけが誇らしげだ。俺より遅く出かける息子を残し、傘を持たずに家を出た。

雨にあたりながらゆっくり歩く。よれた背広から汗の臭いがただよう。濡れようがよれよれになろうが、どうでもいい。車にエンジンをかけ、すぐに国道まで飛ばした。

俺が生まれた海の見える町まで車を飛ばす。今までの自分に間違いはない。間違っていないと、体中に蓄積された他者からの非難と、その周りにたかりつく強欲たちの反吐を、胃の上のあたりで圧縮し、高まる温度を追い越すほどに沸点を高めた。

海に向けて堤防に車を止めると、感情の熱が沸点に到達した。それと同時に、雷鳴が鳴り、大粒の雨が天から降ってきた。

抑えつけられた怒りとも悲しみとも言えぬ感情が吹き出し、俺はやつこのことで大声をあげて泣くことができた。

フロントグラスに雨が叩きつける。俺の胸にも大雨が降る。フェンス越しの更地で泥濘が踊り出す。

痛いくらい突き刺さる心の雨。俺も叩いた、手でハンドルを叩く。雨と涙が気持ち良いほどの音を立てて落ちる。粒。大粒。声を殺し、声をあげ、半狂乱の自分に酔いしれる。

泣いて、泣いて、目尻を擦って。泣いて、ひっくり返った不気味な裏声で泣きわめき、胸にためた生きる証を車の天上、空に向かって、どっと開放した。

パトカーのサイレンが聞こえる。俺は愉快でたまらない。前を向き、アクセルを一杯踏み込む。

この先には何も無い。追われることも無い。雨はやむことなく、この先も、お前たちを濡らして行くだろう。

もう、恐れることは、何も、ない。(了)

『泪』（さほ 著）

『いつも

君の笑顔に救われてた

仕事が忙しくて

なかなか会えなくて

謝る僕に

いつもの笑顔で

大丈夫…って

辛くて悲しくても

ずっと側で見守ってくれた』

夏の日差しを
感じ始めてきた午後

あなたは
突然の別れを切り出す

『君の涙を』

見せない強さが
僕は好きだった

どんなときも
キリツとしていて

でも今は…
やけに寂しいな』

わたしの泪は
あなたの言葉で
封印していたのよ

泣きたくても
泣けない

『強い女』に

なるために

ふと

雨が降ってきた

日が出てるのに

雨の滴が

頬を濡らす

まるで
泣けないわたしに

『泣いても…いっしょ』

と

囁いているように

冷たい雨に
紛れながら

温かい滴が溢れてた

(了)

『ちいさなお家のお話』 (宇瑠璃春花 著)

ある晴れた昼下がり

女の子は古いバスから降りて

地図を左手に、大きな旅行用のかばんを右手に持ち

とぼとぼと目的地を目指しました

女の子は移動で疲れてました

とても遠くの街からひとりできました

少し木々が増えた道の中を行くと

赤や黄色のお花がたくさん咲いている、青い壁のおうちを見つけてきました
小さな青いおうちです

赤い薔薇のアーチをくぐると

足元に足が短くて茶色と白の模様の犬が二匹、女の子にかけよってきて

女の子の足やかばんをくんくん嗅いで

女の子を見上げてにつこり笑いました

ふと、横から

「その犬は、チヨビとチヨボだよ。コーギーという犬なんだよ」と、声がありました

女の子が声の方を向くと、白髪混じりのおばあさんがニコニコして立ってました

おばあさんはカットソーとジーンズにエプロン姿で、手には色とりどりの花の束を持ってました

そして「よく来てくれたね、待ってたんだよ。なかなか来るのが大変だったよね。お茶を出しますから中へどうぞ」

と、茶色の木のドアを開けて、女の子を手招きしました

女の子は軽くペコリとおじぎして、おばあさんの後についていきました

二匹のコーギーもチョコチョコついてきました

おうちの中は木の壁と床で、テーブルと椅子も木でした

振り子時計がコチコチと静かに鳴り

柔らかい色のテーブルクロスやカーテンは

穏やかな陽射しをそつと受け止めてました

おばあさんは、女の子を椅子にかけさせると

ガラスのカップに不思議な香りのする太陽の色のお茶を注いでくれました

女の子はペコリとおじぎして、お茶を少しずついただきました

とてもたくさん歩いてきて汗もかいてたので、お茶がとてもおいしく感じました

「お昼は食べたかい？」と、おばあさんが女の子にたずねました

女の子は頷いて、駅でサンドイッチを食べたと話しました

おばあさんもゆっくり頷いて

「それなら、先にお風呂に入って疲れをとりましょう。その後で晩ごはんにしよ
うね」と女の子を浴室に案内しました

女の子が浴室に入ると、浴槽にはたくさんの種類の草や花がお湯に沈んだり浮い
たりしてました

女の子がお湯に浸かると、不思議なオレンジ色のお湯はゆらゆらして、ぼどよい
温かさがこころも身体もゆっくりします

なんだか、お腹にいる頃を思い出しました

女の子はお風呂で静かに涙を流しました

嬉しいのか悲しいのかわかりませんが
たくさん、泣きました

涙はお湯に溶けて消えてゆきました

浴室の窓からは日の光が穏やかに注いで

鳥の声も聞こえます

お湯の流れて甘い香りを吸い込んで

女の子はお湯から出ました

なんだか体が軽くなりました

自分で持ってきた新しい服に着替えて、さっきの台所に戻ると

おばあさんが料理をしてました

とてもおいしそうな匂いがします

おばあさんが女の子に気づいて

「何を作っているか当ててみて」と、笑顔でたずねました

女の子はス。ハゲティ、ミートソースだと言ひ

当たったごほうびに冷たい麦茶の入ったグラスをもらいました

女の子がテーブルで麦茶を飲んでると

足元でチヨビとチヨボが女の子を見上げているので、二匹を交互に撫でてあげました

女の子は自然に声を出して笑ってました

そこへ、おばあさんがス。パゲティミートソースの大皿と、鶏の唐揚げと、ポテトサラダと、豆のおこわをテーブルに並べて

「さあ、今日はごちそうだよ」と、ニコニコして女の子のお皿に取り分けました

「デザートにケーキもあるよ」と言うおばあさんの言葉に、女の子は喜び、チョコビとチョコボもないしっぱをたくさんふりました

ごはんはとてもおいしくて

本当にとってもおいしくて

女の子は大忙しで食べました

でも、こころはとてもものんびりでした

女の子は、おばあさんにいろいろ話そうと思いました

女の子の表情がまた固くなったのを見たおばあさんは

「焦って話さなくてもいいんだよ。あなたのことは本当にとてもよく知っているもの。大変だったね。よくここに来れたね。いいんだよ、まず食べなさい。後でゆっくりお話ししよう」と穏やかに女の子に話しました

女の子はボロボロ泣きながら、ココア味のハウンドケーキを食べました

きちんと食べました

ちよつとしょっぱくて、涙と鼻水の味もしました

食べたあとは、深い草色の柔らかかなソファに横になりました

二匹のコーギーは女の子の手の届くところにいて、女の子の手をなめたり、撫でさせてあげました

おばあさんは、女の子に温かいほうじ茶を出して、女の子の横に腰掛け

夜遅くまで女の子とお話をしました

女の子は、今まで泣いたり怒ったり、困ったり、うまくいかなかったり、いろいろ悩んだけど、いろいろ考えて、いろいろやったことを、時々涙が出るけど、女の子なりに一生懸命おばあさんに話しをました

おばあさんは、頷きながら、穏やかに、時々二匹のコーギーを撫でながら、女の子を見つめて、女の子の話を聴いて、最後まで聴いて

女の子をハグしてあげました

女の子はおばあさんの、土や、太陽や、草花や、ミートソースや、そういういろいろな優しい香りに包まれて

ああ、やっと安心しました

ここから、ほっとしました

おばあさんは女の子を自分のアトリエに案内して

描いてきたたくさんさんの絵や書いている童話、集めて面白かった本、編んだミサシガやぬいぐるみ、集めた変なガラクタ…そういうたくさんさんの宝物を女の子に見せて、エピソードも話しました

「テレビはないけど、ネットはしてるのよ」

と、今大好きなサイトも見せてあげました

女の子は瞳を輝かせておばあさんに、私の好きなものばかりで楽しくて嬉しいと興奮して話しました

おばあさんは微笑んで、女の子を優しく見つめて話しました

「そうよ、あなたは過去の私。私は未来のあなた。

私はあなたを待ってるの。だから、あなたは私とあなたと、あなたの魂を信じて、愛して、あなたが本当にここからよろこぶことをなさい。

そうすれば、あなたは私になるの。もしかしたら姿は変わるかもしれないけど。私はとてもしあわせよ。

それはあなたが私になるようにしてくれたから。

ありがとう。本当にありがとう。いつかあなたが私になったら、今度はあなたが女の子をハグして導くの。いいわね？」

おばあさんは女の子をハグして、愛をいっぱい渡しました
二人は泣きました

しあわせで泣きました

あたたかい涙をたくさん流しました

あたたかい、ちいさなおうち

しあわせなおうち

そこにいるのは私？あなた？

さあ、魔法の時間です

あなたが本当に望むものを望んでください
それがあなたをしあわせにするなら

それはあなたを待っています

あなたは私

私はあなた

今は未来に

未来は今

ちいさなおうちのお話、これにて終わり

続きは私のところの中に

(了)

以下、参考URL↓

ターシャ・テューダーホームページ

<http://www.tashatudorandfamily.com/>

森のイスキア

http://www.geocities.jp/yuki_no_isukia/mori2.html

『……はあ？』

何時間か前のこと。

「アイキャンフライ！」

が口癖だった幼なじみの高之が煙となって火葬場の煙突から空へと飛び去るのを見つめながら、僕は耳にあてた携帯越しに菜穂の侮蔑をたっぷりと含んだ声を聞いていた。

「いやだからさ、愛してる、って」

『だあかあらあ、そういうの、もうやめて下さいませんかあ？』

菜穂のその、いかにもさっさと話を終わらせたいような口ぶりに、僕は親友を失った哀しみも吹っ飛んでしまった。

「あのさ菜穂、親友の葬式に出るからしばらく連絡とれないかも、って言ったのは僕だけどさ、全部終わって不意に恋人の声を聞きたくなる、ってのがそんなに」

『あのね泉堂さん、』

菜穂は僕の話が強引に遮るように口を挟む。

しかも、『泉堂さん』とききた。

『確かに告ったのは私だけどさ、仕方ないじゃん。泉堂さん、つまんないんだし』

「つ、つま」

僕は突然の、そう、突然の菜穂の変化に、ただ呆気にとられるしかなかった。

『遊びに行くのもありきたりの所ばかりだったし、話しててもおもしろくないし、』

「げけんな、そりやお前がつまんねえ他人のコイバナとかばっか話すからだろ」ムツとした僕が言い返すと、電話越しに菜穂のおおげさなため息ひとつ。

『そう、そのつまらないリアクションも嫌いだっ……あつ、ちよつと……』
「ちよつと、つてなん」

だよ、とは言えなかった。

電話の向こう側から感じる雰囲気が変わったからだ。

『泉堂さん？』

突然聴こえてきたのは、聞き慣れた男の声。

間違いない、今年うちのサークルに入ってきた町田だ。

いかにも遊び慣れている感じのイケメンで、良く言っただけなフツメンの僕はあまり好きではない奴だったのだが……。

「なんで君がそこに居る？」

何故か背筋を伸ばした僕が先輩らしい口調で尋ねると、町田もまた、菜穂と同じようなおおげさなため息ひとつ。

『空気読んでくださいよ。菜穂先輩と楽しくやってたのに、台なしじゃないですか』

……は？

菜穂と、楽しく？

空気、読めって？

僕の脳裏に、菜穂と過ごしてきたこの半年間が過ぎる。

サークルで一人浮いていた僕に突然告白してきた菜穂に、舞い上がりながらOKしたこと。

ずっと一緒にいた年末年始。

いつも楽しそうにしていた冬の日。

春になって会う機会が少なくなった時のあの焦燥感。

『……んもう、やめてよジュン……』

電話の向こう側、遠くの方で、菜穂のくすぐったそうな声が聴こえる。

もう、それだけで十分だった。

「うがあ！」

僕は突然沸き上がったなにかどす黒い衝動に耐え切れず、手に持った携帯を思い切り地面にたたき付けると、全速力で駆け出した。

自分がどこに行こうとしているかまったく解らないまま、とにかくがむしやらに火葬場からの道を駆け下っていく。

とにかく、ここじゃない。

高之が逝き、菜穂が去ったここは、僕の場所じゃない。

無我夢中に走り抜けているうちに、途中で足元がアスファルトじゃなくなった事には気付いていたが、そんなことはほんとどうでもいい。

僕は走った。

小さい頃に高之とはしゃいでいた時みたいに。
去年のクリスマススイブに菜穂とふざけてた時みたいに。

ただがむしやらに。

頭が真っ白になるくらいに。

走って。

走って。

走って。

そして、崖から落ちることになったんだ。

※

「ははっ、情けないなあ……」

身動きができなくなつて、何時間が経過したんだろう。

腕時計もしていないし、携帯は地面にたたき付けてしまったし、何より、腕が1ミリも上がらないし。

「大学に行く意味も解らない、彼女は寝取られる、高之は逝っちまう、」

『心配すんな。お前がどんなになつても、俺は一生お前を受け入れっからさ』
満面の笑みで言う高之の顔を思い出して、不意に鼻の奥がつん、と痛みだす。

「……バカヤロ、おめえの一生、短すぎだろって」

見上げていた星空がじわりとぼやけ始めて、僕はようやく自分が泣いているんだ、とわかった。

「なんで……っ」

吐き出した声が震える。

息を吸ってるのか吐いてるのか解らなくなる。

「しんど……かつたんなら、なん……」

で、という声が、しゃくり上げたせいで言葉にならない。

「なん……でっ」

『なんで』が、ひくっ、というしゃくり上げに邪魔されてすらすら出てこない。

「な……んでっ」

上手くいかない。

僕は、ちゃんとしゃべることもできないのか。

親友に語る言葉も、ちゃんと出来ない男なのか。

「……うひっ、うふっ、」

胸の奥から競り上がってきたさつきとは違う何かが、僕の開いた口から声にならない声となって漏れていく。

鼻水が鼻から漏れ、開いた口からも涎がたらたらと垂れて、どちらも頬を伝って落ちていくが、今の僕にはどうでもいいことだった。

「たか……っ」

僕もどうせ、すぐに逝く。

そしたらお前は、また受け入れてくれるだろうか。

あの、満面の笑みで。

そして。

せりあがってきていた何かが、僕の頭の中で、ぽん、と破裂した。

「……うあつ、うああつ、」

どこか遠くの方から、言葉になつてない叫び声が聴こえてきた。
僕の叫び声だ。

「うあああああああつー！」

高之もいない。
菜穂もいない。

僕を受け入れてくれる人は、もういない。

「うあああつ、くひつ、うあああん」

誰もいない。
助けも来ない。
僕を助けてくれる人なんて、誰もいない。

「うあああつ、げほつ、ぐぼつ」

内臓がダメになってたのか、むせた途端に、口の中に鉄の味が広がる。
僕はむせながら、『死』が覗き込んでいる気がして、何故か笑いたくなってきた。

「げほっ、へっ、へへへへっ」

僕は笑い続ける。

目に涙をいっぱい溜めながら、何も考えずに笑い続ける。

「ふっ、ふ、ふはははっ！」

やっぱり、これは喜劇だ。

喜劇なら、笑わなきゃだめだ。

「ふはっ、ふはははっ！」

僕の馬鹿笑いは、森の木々の隙間を抜けて、星空へと上っていく。

そう、あの煙のように。

「ふはははっ、アイ、キャン、フライ！だ！」

そして僕は、意識を失った。

『……し、もう一回……』

……遠くから、声が聴こえる。

『……いた！生きて……！』

僕は、どうなったんだろう。

『……べ！慎重に……』

遠くから聴こえる声に併せて、僕の身体から重力が無くなる。

なんだ、やっぱり死んだんだ。
これでもう、解放されたんだ。

『……み、きみ！しっかり意識を……』

遠くからの声が、まるで語りかけてくるように聴こえる。

冗談じゃない。

せつかく解放されたんだ、誰かの命令なんて知るかつての。

僕は自由だ。

自由に空を飛んで、あいつのところに行くんだ。

『……いじょうぶ、助かるから……』

うるさい。

僕は飛ぶんだ。

そう。

飛ぶんだ僕は。

高之みために。

アイ、

キャン、

フライ!

(了)

『アイ・キャン・フライ』（榊崎 六呂著）

僕はいま、木々の隙間から見える星空を見つめながら、これが僕の最期に見る景色か、とぼんやりと考えている。

時折激しい睡魔に襲われるが、それに全てを委ねようとする、動かない身体、節々から間隔をおいて刺しこむ痛みが、僕の意識を否応なしに現実へと引き戻す。

そう。

この、マイナーすぎて誰も近付かないような山中で、素人のくせに登山道とはとても言えないルートをとり、結果足を踏み外して崖から落下して身動きが取れないなんていう、悲劇とも喜劇ともつかない、くだらない現実へと。

※

『無題』（流民 著）

そこには勇者はいない。

その椅子に座ったものは誰もかれもが脅え、その恐怖に打ちひしがれる。

そして最後にはもう死んだ方がましだと思いつながらその地獄の中に身を投じる。

しかしそれは自分の行いがすべて悪いのであって、誰も責める事は出来ない。

だから、そこに座る人々は誰もが諦めるか、あるいは大声で泣き出す、それはまるで子供の様に……

涙は止まらず、ただひたすらに懇願する。

どうか助けて下さいと……

そしてほかの椅子からも同じような声が聞こえる。

「いやだ！助けてくれ」

「痛い、痛い、痛い、痛い……」

しかし、その行為は終わらず、永遠とも思われる時間を、その椅子に座った人達は耐える。

まっとうに生きてこなかった自分を恨み、親を怨み、先生を怨み。

そして、また涙する、その涙は枯れることなく、永遠とも思える時間が続く限り流れ出す。

枯れる事無く流れ出す……

そう、それが歯医者というところ……
(了)

俺もやっと、自分のやりたいこと、見つかったよ・・・

彼女は、微笑を返してくれた。

——その笑顔、

ずっと守ってくれる奴、探せよ……

俺？

過去（むかし）も、現在（いま）も、未来（このとき）も、

ずっと、友達だ。

ずっと、みんな、友達だ。

ああ、ずっとだ・・・

強い意志を持つとな・・・

お互いの『夢』、叶える為に。

(了)

『意思とWILL』 (矜持 著)

その子からは、よく相談を受けていた。

ところが……

彼女は、僕の「言動の裏側」を読み取り……

もともと頭のいい女の子であったが、この時は更に敏感で。

同情された、と思ったのだろう。

もしくは、「恋愛感情」を持たれた、と……

「激しい言葉」を、僕に投げつけた。

僕が、1週間程落ち込み、「冷たい涙」を流した程だ。

……しかし、それは、「僕が言わせた」のも同じだった。

同じくらい彼女も、傷ついたので、だろう。

それから、どれくらい月日が流れたか、よくは覚えていなかった。

友人Aから、彼女の就職祝いをやろうと、電話がかかってきた。

彼女が、市のカルチャーセンターで、手芸の講師をすることになったらしい。僕と、彼女のと諍（いさか）いなど、知る由もない彼は、楽しげだった。

当日、何かプレゼントでも、と思って大阪のショッピングモールの中を、とぼとぼ、歩いていった。

正直、彼女と会うのが、憂鬱だった。

でも、友人として、お祝いしたいのど、謝罪したい気持ちは、まだ残っていた。ふと、アクセサリー売り場を眺めていた。

すると、ある「言葉のイメージ」が……

しばらく、忘れかけていた気持ち、だった。

「これ」を、探そう。

小走りに、ショッピングモール内のアクセサリーショップを探し歩いた。

なかなか、「言葉のイメージ」にぴったりくるものが、見つからなかった。一時間程、歩き回っただろうか。約束の時間まで三十分しかないと気付いた。

妥協はしたくはなかったが……時間に遅れる訳にはいかなかった。

最初にイメージした商品を置いてある店に、戻った。

プレゼント用の包装をしてもらい……

あまりに値段が安いのが気になったが、「値段の問題ではない」と言い聞かせた。

プレゼントとは、ものをあげるのではなく。

気持ちを伝えることだ、と、「自信のない自分に」、言い聞かせた。

待ち合わせ場所の居酒屋に行くと、友人Aだけが、待っていた。

「そういえば、Cちゃん、今日、誕生日だった。お前、何か買ってきた？」
ああ……

「ああ、よかった。お前買ってなかったら、俺だけ渡せへんやんか。」
いつも、ニコニコうれしそうな彼は、有り余る欠点があるが、
優しい男だった。

——忘れていたのか、知らなかったのか、
私の誕生日の四日前、だった。

彼女が、友人Bと一緒に現れた。
やはり、僕からは、目線を外していた。

……そして、僕も目線を外していたのだろう。

店内に入って、4人で座った。

真正面が彼女だった。

視線は、ずっと下を向くか、友人Aを指していた。

友人Aが、

「ではCちゃんへの私からのプレゼントを・・・」
嬉しそうに、彼はプレゼントを取り出すと、彼女も嬉しそうだった。

誰にも、悟られないように、深呼吸をして。
カバンの中から、プレゼントを取り出した。

これは、俺から。

「強い意志（いし）を持って下さい」という気持ちを含めて・・・
彼女は少し、笑顔を見せて、包装を空けてくれた。

無骨なメタリックの「石（いし）」のペンダントがついた、ネックレスだ。

彼女は、何も言わず、ネックレスを付けてくれ・・・

今日、初めて微笑んで、「ありがとう」と言ってくれた。
ほっとしたのか、僕もやっと笑顔を返すことが出来た。

その後は、楽しい、本当に楽しい時間を過ごす事が出来た。
学生時代や、恋愛の話、級友の所在など。
程よく、酔いが回った頃、お開きになった。

家に帰って、いつものようにPCの電源を入れた。
メールが一通来ていた。

彼女からだった。

たった、二行だけのメッセージ。

『素敵なプレゼントを、ありがとうございます。』

大切にします。』

これだけの言葉が、こんなに嬉しいなんて・・・

「温かい涙」が、頬をつたった。

しばらく、ずっとそのメッセージを眺めていた。
僕の涙が枯れることは、なかった。

そして、一年前、ある会場で、彼女と再会した。
お互い、一瞬で、わかった。

「私は60歳になるまでに……」

いや、だから、それ、お前の悪いところ……

「体の方は大丈夫？」

ああ、ありがとう。



『君へ』（涙夏 著）

雲の切れ目から顔を出した：

それが当たり前にも思える空に

今、私が抱えている憂鬱な気持ちを噛み殺し

引き攣った笑顔で、こう呟くのだ

「今日もまた、見知らぬ人に仮面をかぶった私は嘘を吐く」

そんな自分が嫌いで

それを受け入れる世界が嫌いで

いつそ明日なんて来なくていい、消えてしまえばいい

ウソヲツク事に慣れすぎた僕にはもう君の愛もわからないのかもしれない

私達はきつとこの狭い世界の中で

それぞれの翼を探して飛びたてる日をまっつているんだらう

だけどそれをみている空はそんなものは夢なのだど笑っているように

いつそ何もない真つ白な世界にこのまま沈んでいけば
君の所へと逝けるのだろうかと自分の首へ手を伸ばす

だけど私は、未だ明けないこの夜空の下で
矛盾した願い、未来なんてものを描いたりして

今思えば、私は信じていたのかもしれない

君が口にした、あの日がハジマリだと言…を…

だからこそ私は…君を…せないだらう

どうして…だって？…だつ…現実…今日は
信…た人……き出される裏切りの言葉に怯…て

「も…諦……しまえば…い」

そんな心の声…ら聞こ…る始末
私に…もう、君を忘れる術がわ……ない

ただもう一度あえたなら伝え…

滲む視界、すでに自分が何をしていたのかすらわからない
ただ私は君にこの思いを届けたくて筆を取ったはずだった

何度も何度も有り余る白い紙に向かって
君への変わらない気持ちを綴って…涙で消えて綴って…

涙で滲んだこの心の叫びをいくつ破り捨てただろう

毎回、毎回、この言葉が書けない
たった一言たった一言が書けない

「ひっ…うっうあああ…うえ…うっふああ」

吐きそうな程の嗚咽を飲み込んで
震える掌を血が滲むほど握りしめ震えを堪える

「うっ…あああああああ！」

止まらない涙と鼻水を、洋服で拭い去る

「どっ…うっぢでえ…！」

嗚咽を越えて出た音は、声と呼ぶには汚すぎて

「ひっうあっ…あああああああ…」

体の震えが涙が、後悔がとまらない

いや、それは止まるどころかさらに勢いを増して

「うあああ！ぐっ…うえ…んあっ…あああああ…」

叫びたい 君に届けたい たった一言の言葉

伝えたい 汚くたっていい 見苦しくたっていい

大切なのは 形にすることだって 君に教わったから

すでに言う事を聞かない体を意思だけで動かす

いや、動いているかすらわからない朦朧とした意識の中で

私は、握っていたペンでソレを殴りかいてやった

「うあああ、うあああああああああ！」

ただもう一度あえたなら伝え……

だいすき

(了)

『涙』（流民 著）

いつの頃からか、それは私の身体を蝕んで行った。

体は熱く燃え上がり、痛みを伴うそれに私は長い、長い間耐え忍んだ。

身体は傷だらけで、満身創痍の状態、それでも私はそれに耐えた。

もうそれに耐えきらなくなった私はついに涙した……

それは、まるでいっぱいになったバケツから水が溢れるかの如く、次から、次から滴り落ちる涙、涙、涙。

ただひたすら涙する。

私の涙はすべての人々にも伝播し、私の涙に濡らされた者は皆そろって涙した。

ただただ、人々は涙する。

それでも私の涙は止まる事を知らず、こぼれ落ちる。

いつまでも、いつまでもこぼれ落ちる涙、声にならない痛みを今まで我慢してきた私はそれでもまだ足りないと言わんばかりにひたすら、ただひたすら涙する。

人々もその私の涙の意味を理解しているのか、ただただ涙する。

いや、それだけではないのだろう、自分たちの過ちを悔いるかのように、人々もただただ涙する。

ある物は声を上げ、またある物は声にならないほどの、悲しみの涙が世界中に伝播する。

その涙を見て更に私は涙する、人々を悲しみの涙に包んでしまった事に私は悲しくなり、より一層涙し、その涙はすべての汚れた物を浄化するかのように、何もかもを洗い流すかのように総ての物を悲しみの色に染める。

やがて、人々の泣く声も聞こえなくなり、私は一人になってしまった事に気付く。

孤独という現実が、更に私の悲しみを呼び、また涙する。

悲しみの色に染められた滴はいつまでも私の身体を濡らし続け、その悲しみの色に染められた私は更に悲しくなる。

それは私の罪と罰なのだろう、人々の悲しみはもう私には届かない。

悲しみを届けるであろう人々は、もう私の下にはいないのだから。

どれくらい私は泣いていたのだろう、どれくらい泣いていたかという事も解らない程、私は泣いていた。

泣き止んだ私の身体には新たな海が広がり、その海の中には新たな生命が芽生えようとしていた。

私の涙と、いなくなつた人々の涙は新たな海を作り、その中には新たな生命を育んでいた。

新たに生まれた生命に、私はまた涙した。

しかしその涙は今まで流した涙とは違い、暖かく、慈愛に満ちた物だった。

私の涙は新たに生まれた生き物たちを育み、それを見た私はまた涙した。

その涙は、新しい生命を更に成長させ、その姿に私はまた涙する。

繰り返し、繰り返し私は涙する、その度に新しい生命は成長し、いつしか新しい生命は一人で生きていけるほどに成長した。

やがて私の涙は止まり、悲しみのと喜びの色に包まれた空は晴れ、雲の間からは新しい命を更に育む光が私の身体を照らし出した。

成長を見届けた私は眠りについた、泣き疲れた体を癒すかのように、過去の悲しみを時間が癒してくれるのを待つように……

太陽は眠りを促すかのように、その光で私の身体を包み込む。

まるで、もう何も悲しむ事などは何もないのだよ、そう語りかけてくるかのように、太陽の光は私の身体を包み込む。

次に目覚める時はいつかは解らないが、願わくば、新しい生命が私の事を悲し
ませない事を願って……

(了)

『「人生」という映画』 ～魂の鼓動～ (矜持 著)

誰にでも、どんな名作映画より、「泣けるシーン」があるだろう。自分の人生において、「輝かんばかりの一瞬」が。

ちょうど、1年程前だろうか。

所属していた和太鼓道場の、道場主である友人Bからメールが来た。

「発表会、見においで！」

当日、ビデオカメラと三脚を持って、発表会の会場を訪れた。

開場まで、時間があつたので、目立たないように、ロビーでくつろいでいた。

3年前。

病気が少しでも良くなる様に、と思つて入門した。

たった一年間だが、和太鼓が、「かげがえのないもの」になった。

そして、発表会の日、仲間達の笑顔を貰つて……

ふと、気が付くと……

遠くから、お辞儀のする二人の女の子。

そのうち、一人が駆け寄つてきた。

「お久しぶりです！」

私が出た当時、「ボケ&ボケ」として、私と組まされていた、女の子。

「もう、いつも後ろから、違う音がするから……間違えるんですよ！」

「怒つたふり」の笑顔で、いつもそう言つてくれた、女の子。

……次の彼女のひと言で、私は言葉を失つた。

「もう、戻って来られないんですか？」

……泣きそうに……なった。

2年前、友人Bに、メールを打った。
悪いが、道場を辞める。理由は聞かないでくれ、と。

「理由」は言えなかった。

言えば、友人を苦しめるだけ、だったからだ。
返信が来た……

「うん、わかった。聞かない。

でも、友達でしょ？また飲みに行こうね。

……いつでも、戻っておいで。」

真夜中の、一人の部屋で、嗚咽を漏らして、泣いた……

発表会が始まった。

ずっと、ビデオカメラを回していた。

昔の仲間たちは、見違える程、うまくなっていた。

当然、あの女の子も。

私が出た頃に、時折見せた、「自信のない」顔ではなく、喜びに満ちた笑顔で、叩いていた。

休憩を挟んで、講師である友人Bの演奏が始まる前……
ビデオカメラのバッテリーが上がった。

……またか。

時間もなく、予備のバッテリーを用意してなかった。

思えば、その前の年も、バッテリー切れで、彼女の演奏が取れなかった。

今年の発表会には、行かないつもり、だ。

今度、私が、発表会を訪れるのは、
私自身が、ステージに立つ時だ。

自分の「魂の鼓動」を

全身全霊を込めて

打ち響かせる為に。

(了)

「それは、まだはつきりとは言えませんが……ミルズ様にご迷惑が掛かるような事は一切ありませんのでご安心ください。ミルズ様はどうか職務を全うされますように」

「ああわかった、ビクトリア様がそう言われるのであれば、それに従おう。しかし、ジャークトの件はどう対処すればよい？まさかこのまま逮捕するのか？」
ミルズの疑問に秘書は答える。

「はい、ジャークトはこのまま逮捕されるのが良いかと。そして、それはビークツク総司令官の名においてされるのが一番でしょう、そして、時を見計らってこちらで次の手を打ちますので、そのようにして頂けますかな？」

「わかった、ではそうしよう。しかし……まさかこの私も同じようにするのではないだろうな？その時は解っているだろうな？」

ミルズは秘書に脅しを掛けるように言い放つ、そして秘書も冷静に答える。

「ご冗談を。そのような事ビクトリア様は望んでおられません。先ほども言いましたが、今回の事でミルズ様にご迷惑が掛かるようなことは一切ございません。どうかご安心を」

秘書の言葉を聞いてミルズも安心したのか、その場は引き揚げ、ジャークトの逮捕に向かった。

そして、ミルズは憲兵総監部の戻り部下に、ジャークト逮捕の命令を下す。しばらくして、ミルズはビークツクの面会を求めた。

逮捕、処刑の書類にビークツクのサインをもらう為である。そこでビークツクも少し不審に思い、ミルズに話しかける。

「逮捕、処刑は解った。しかし、この類の書類のサインは本来法王陛下の名において行われるはずだが？これはいったいどういう事かね？」

そう言われたミルズも正直に言うことも出来ず、用意しておいた嘘でごまかす。

「確かに、本来ならば陛下の名においてのみ、処刑は執行される事になります。しかし、今回に限っては軍部内の出来事、それにアウラーンとの戦争も始まったばかりです、そんな折に軍の、それも軍幹部が逮捕、処刑などと言う事が軍全体に知れ渡ってしまえば軍の士気にかかわることになるやもしれません。それを考慮したうえで今回の判断です。最前線では軍旗を犯したものを略式での処刑ができるようになっていきます。今回もその特例、と言った事での配慮とお受け取り頂ければよいかと」

ミルズの説明に少し不信感も覚えながらも、ビークツクは書類にサインをし、その書類を渡した。

「では、ミルズ長官、後の事はお任せするよろしく頼む」

ミルズは敬礼をして、ビークツクの部屋を後にした。

しかし、この事が後々ミルズの胸中に重しとなって押し掛かろうとはその時は思ってもいなかった。

そして、処刑を明日に迎えた日、軍刑務所のある、監獄船ではある陰謀の元に、一人の囚人が逃げ出すという事件が起こった。

深夜と言う時間帯にもかかわらず、ミルズの元に一本の電話が掛かる。

「長官、大変な事が起こりました」

寝ぼけ眼のミルズは慌てふためく部下にこんな時間に起こした理由を問いただした。

「こんな時間にいったいなんだというのだ？」

「はい、只今入った報告によりますと、死刑囚のジャークトが何者かの手助けによりアトールス軍刑務所から脱走したと報告がありました」

その報告を聞いて今度はミルズが慌てふためく。

「何？それはほんとか？それで捜索はどうなっておる？」

「ハッ、特殊な事情での逮捕であったので、大掛かりな捜索も出来ず、パトロー
ルを強化するにとどまっております」

くしまった、まさかこれを狙っていたのではないだろうか？しかしこうなつてはもう遅い>

ミルズは胸の中でそう呟き部下に幾つか指示をだし、服を着替え、憲兵総監部に急いだ。

ミルズは到着早々、部下に更に指示をだし、搜索の強化をはかった、しかしその努力もむなしく、夜は明け、ついに最悪の事件が起ころうとしていた。

その日、ビークツクは朝からアウライン首脳部と会談する予定だった。秘密裏に行われた折衝の成果が、その日ようやく実つたのだ。

しかし、秘密裏に行われる予定だったため、司令長官の護衛の人数は極端に少なく、必要最小限のものでしかなかった。

護衛の任務に就いていたのはカレントと、カレントの配下の陸戦隊数名、それとカレントの旗艦に総司令官を送り届ける為のパイロットが二名がいるのみだった。

その日の会談は、アウラインとの戦争状態をこれ以上膠着させないための物で、その会談に成功すると、他星系に行くのに必要な分の燃料と、物資、その他の必要物資を手に入れ、アウラインの星系を出て他の星系に行く事を約束するための予備会談だった。

その役を総司令官自らが、アウラインに出向いて行うはずだったのである。

これにより、全面戦争は回避され、お互いは平和に暮らす事ができるようになる、という重要な会談だった。

しかしその時は来てしまった。

一発の銃声が歴史を変える、それは今までにも数多く存在する歴史の事実だったが、今回の銃声もその歴史から漏れることなかった。

そしてその銃声は、重大な転換点を失うには十分な物であった。

カレンの眼にはその瞬間はスローモーションに見え、大事な物を失う瞬間が眼に焼き付き、血を流しながら倒れる祖父の表情の一つ一つが鮮明にカレンの脳裏に記憶された。

その永遠とも思える一瞬はあまりに非情で、なにが起こっているのかもわからないままカレンはその場に立ち尽くした。

「お爺ちゃん？ねえお爺ちゃん。そんな所に寝てたら風邪ひいちゃうよ、早くお家に帰って寝ようよ！ねえお爺ちゃんたらー！。お願い！返事をして、私を一人にしないで」

そう叫びながらもカレンの瞳からはとめどなく涙があふれる。

その間にもビークツクの身体からは血液が流れだす。

周りの景色など殆ど眼に入っていない。

部下たちが何事か叫んでいるが、それも聞こえない。

ただカレンは、ビークツクの体をゆすり、彼の眼が開く事を望んだ。

そしてビークツクはカレンの望みを少しだけ叶えた。

その切れかけた運命の糸を繋ぎ止めるように、彼は最後のほんの少しだけの時間をカレンの望みを叶える為だけに費やした。

「カレン……ワシはどうなっておる？」

「お爺ちゃん、大丈夫！絶対助かるから、だから私を一人にしないで！」

「お前は昔から嘘をつくのが……下手だったね……今思えばお前には悪い事をしたね……許しておくれ……お前の父さんと母さんを死なせてしまったのも……もとはと言えば私のせいなのだからね……本当にすまない事をした……」

「そんな事どうでもいい！だからお爺ちゃん、しっかりして！」

その間にもカレンの瞳からは滴が零れ落ちる、それをぬぐう事もせず、ただ流れ落ちるに任せてカレンはビークツクの意識を、命を必死になつて繋ぎ止めようとしていた。

「カレン……最後に……言っておきたいことがある……ワシの最後のお願ひじゃ……聞いてくれるか？」

涙を蓄え、それが瞳から溢れるほどに涙が零れ落ちてくる。

「最後なんて言わないで、お願いだから」

「カレン……最後の言葉になるんじゃない……お願いじゃから静かに聞いてくれ……」

その間にもビークツクの腹部からは血が流れだし、どんどんとビークツクの体温を奪い、魂を死の淵へと引きずり込もうとしていた。

その表情の変化を見てカレンはビークツクの言葉に耳を傾ける。

「アウラーンとの戦争を……必ず回避してくれ……アウラーンとは戦ってはならん。絶対にじゃ、頼むカレン、ワシの最後の頼み聞き入れてくれんか？」

「わかった、お爺ちゃん約束する！だから……だからお願い！最後なんて言わないで」

その言葉を聞き終える頃にはビークツクの意識は混濁し、幻覚が見え始めてきていた。

「おお、アルメシア、お前は変わらず美しいな……ヒューゴも、なんだ、クリスマスティンまで来てくれたのか……今からワシもそっちに行くからな……」

その言葉を最後にビークツクの運命の糸は切れ、もう二度と戻る事のない旅に
でた。

「お爺ちゃん？お爺ちゃん、お爺ちゃん眼を覚まして！ねえ、お願いよ！お願いだから眼を覚ましてー」

カレンの瞳から涙は絶えることなく流れ続けた、その悲しみをすべて身体の外に流してしまおうとするかのように、ただただ、カレンの瞳からは涙があふれる、泣き疲れるという事もなく、カレンの悲しみを癒す事もなく、ただ涙は溢れ続けた。

その日、一人の英雄が死んだ、その死はアウラーンとザンクの戦いに終止符を打つことのない泥沼の戦いに引きずり落とすための最初の一滴になった。

(了)

『星々の大海（三）』（流民 著）

※この作品は、二〇一二年八月末に締め切りとなる当コミュニティの企画『架空戦記「惑星アウラーンの大戦」』への参加作品も兼ねています。

会議から二週間が過ぎようとしたころ、ある噂が軍部の中に拡がった。

『技術部のジャークト中將は賄賂を受け取り不正を働いている』
そういった内容のものだった。

証拠がなくては憲兵も動けず、ただ身辺調査をするに留まった。

しかし、ある日ビークツクのもとに差出人不明の手紙が届く。

封筒の中には、ジャークトが不正をした証拠が整理された状態で入っていた。

「ふむ……差出人は不明か。さて、どうしたものか」
少し考えてビークツクは憲兵長官を自室に呼んだ。

「ああ、ミルズ長官、忙しいのに呼びだして悪かったな。まあ座ってくれ」
ミルズは勧められるままにソファアに腰掛ける。

「いえ、お気になさらないで下さい。それで御用件とは？」

ビークックは届いた封筒をミルズに手渡す。

手にとった封筒の中身を確認したミルズは、驚きの声をあげる。

「こ、これは！？閣下、いつたいこれをどうやって？」

「解らん、今朝この部屋に来たときにワシの机の上に置いてあったんじゃ。それで、その資料で立件はできそうかの？」

難しい顔をしてミルズは答える。

「普通であれば、これだけの物証がそろっていれば起訴して有罪まで持っていく事ができると思われます……ですが……」

「やはり、出所が不明、と言う所がネックかね？」

そう続けるビークック。

「はい、この資料自体も捏造されたものの可能性もあります。しかし、調べてみる価値はあるかと思えます」

ミルズは自信ありげにビークックに答えた。

「そうか、では、この件、ミルズ長官にお任せするでしょう。良いかなミルズ長官？」

「ハッ、了解いたしました。それでは早速取り掛かせて頂きたく思いますので、これにて失礼いたします」

ミルズは敬礼をして、ビークツクの部屋を出る。

それと入れ替わりにカレンがビークツクの部屋に入る。

すれ違いざまカレンは立ち止まり、ミルズに敬礼し、部屋の中に入る。

部屋の中からは、なにやら深刻な話が聞こえるが、ミルズは急ぎ足で連絡船の方に向かい、そのまま連絡船に乗り込み、そしてビクトリアコンツェルンの母船に移動した。

そして、ビクトリアコンツェルンの母船に到着し、すぐに本社に行く。

本社に着くなり、ビクトリアの秘書に面会を求めた。

「これはこれはミルズ様、ようこそおいで下さいました」

笑顔で挨拶をする秘書、それに言葉を返すミルズ。

「そんな悠長な挨拶をしている場合ではないぞ！司令長官にジャークトの秘密がばれてしまいそうだ、そうなってしまつてはこれからの計画に支障をきたす。どうするつもりだ？」

「まあまあ、ミルズ様、落ち着いて下さい。それもビクトリア様の計画の内です。どうかご安心ください」

不審な顔でミルズが問いただす。

「計画？ いったいどういう事だ？」

コミュニティ紹介

Mixiコミュニティ『創作が好き!』

創作が好き、何かを作るのが大好きなひと、いらっしやいませ。

文芸文学、SFやファンタジー、詩や川柳。絵画やイラスト、立体作品、写真やインスタレーション。音楽や歌詞。ケーキやお料理まで、なんでも歓迎。

とにかく「創る」人のためのコミュニケーションを支援し、その情熱を応援します。

(コミュニティスペック)

開設日 : 2012年02月20日

管理人 : しちみ黒猫

副管理人 : かる

カテゴリ : 趣味

参加条件と公開 :

レベルだれでも参加できる(公開)

トピックの作成権限 :

参加者が作成できる

コミュニティurl :

http://mixi.jp/view_community.pl?id=5922574

Mixiコミュニティ『創作が好き!』編集
作品集
『泣物語』

編者 檜崎 六呂
2012年7月1日 第一刷発行

なお、本紙に掲載された著作物は、それぞれの著作者に著作権を有します。